

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

観光化にともなう寺院側の自己規定：
柴又帝釈天機関誌『柴又』における聖俗表象を中心に

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小高, 絢子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002000598 |

観光化にともなう寺院側の自己規定 —柴又帝釈天機関誌『柴又』における聖俗表象を中心に—

小高 絢子

はじめに

本稿は、近年様々な人々の参詣を受け入れる仏教寺院の、観光との関わりに着目し、寺院発行の機関紙や新聞記事における発言をもとに、「聖なる」仏教寺院という制度宗教内部において「俗なる」観光がいかにつえられてきたのか、その二分法的な聖俗表象の間で見られる寺院の意識や模索を通して、寺院の自己規定の変遷を考察するものである。その背景には、宗教の影響力の低下が指摘される現代において、檀家・信徒の減少によって廃寺に陥る寺院に注目が向けられる一方で、観光目的で寺院が賑わう様子を例に、その観光と宗教の接近に着目する研究群があること、またその研究群においては制度宗教内部の動向に対する研究が発展途上である、という筆者の問題意識が存在する。

1. 問題の射程

(1) 宗教と観光の接近、その研究動向

近年、日本の仏教寺院においては、核家族化や過疎化といった社会構造的な変化や、信仰心の希薄化といった宗教意識の変化によって、墓じまいや、葬儀の減少、檀家・信徒の減少といった目に見える形での寺院離れが指摘され、存続の危機に陥る寺院に注目が集まっている [相澤・川又編2019] [鵜飼2015] [櫻井・川又編2016]。

その一方で、寺院を訪れる人々の動向に視点を転じてみると、パワースポットや御朱印といった語とともに寺院が紹介される様子を、観光雑誌や女性誌、ウェブサイトやSNSでしばしば目にする。実際に、寺院の訪問動機をたずねた調査では、「お葬式、法事などの仏事」、「供養・お墓参り」に次いで、回答者の約半数が「観光・名所めぐり」を動機に寺院を訪ねることがある、と答えるほどに、現代では観光が、寺院を訪れる際の大きな動機となっている¹。また、サンチャゴ・デ・コンポステラを目指す巡礼や、四国八十八カ所霊場などの宗教的聖地でも、訪問の動機が信仰や病氣平癒などの現世利益から離れ、「スピリチュアルな雰囲気魅せられて」、「自分を見つめなおしたい」、「ハイキング気分」などのように多様化していることや、信仰心に他の目的（健康増進や、参加することの楽しみ）を組み合わせる多目的なタイプが見られるようになってきているという [佐藤2004:220-224] [松井2008:17-18]。

以上のような、文化観光としての宗教的聖地への訪問、すなわち宗教と観光が接近、融合する状況を焦点化する研究においては、参拝者の参拝動機・形態の多様化の他にも、1990年代以降の消費文化と情報技術の急速な進展がもたらす宗教の質的な変化、というソフト面での影響や、近代の交通インフラの整備による地理的变化などのハード面での影響、メディアや行政などの世俗的アクターの働きかけによる聖地の競合関係、などが指摘されている [岡本2020:58] [山中2012,2016]。

(2) 制度宗教内部における二分法的な聖俗表象とリミナリティ

上述のように、仏教寺院を含む、現代における宗教と観光の接近の特徴や要因が様々に考察される一方で、そのような状況下での制度宗教内部の動向を取り上げる研究は多くない。その理由として、卯田卓矢は、宗教者や宗教組織がツーリズムに関わることを「俗的」で「ネガティブ」なものと忌避する傾向があること、換言すれば聖（宗教）と俗（観光）の聖俗二分法的な価値観が優位であることに関係があるのではないかと指摘する [卯田2020]。また、藤村健一も同様に、京都の拝観寺院と京都市行政の古都保存協力税をめぐる対立を例にとりながら、観光と宗教、観光施設と宗教空間との関係が対立の可能性を孕んでいると言及した [藤村2016]。仏教寺院という制度宗教内部においては、寺院が「聖」の側であるという自己規定が前提として了解されていたと見ることができる。

しかしながら、現代においてはむしろ宗教者側から観光に接近していくような様子が見出される、ということも指摘する研究も存在する。たとえば卯田は比叡山延暦寺を事例に、延暦寺が戦後に参拝者誘致に関わる活動を展開し、当時のツーリズムの動向に敏感に対応しながら、交通会社や旅行会社などと主体的に関わることで観光地化を進めていったプロセスを明らかにした [卯田2020]。また、岡本亮輔は四国遍路と長崎のキリシタン関連遺産を例にとりながら、その両者の巡礼言説において、スピリチュアルな語りを使用したり、カトリックの伝統的な信仰以外を認めるような姿勢が見られたことに着目し、伝統宗教の担い手や制度宗教内部においても信仰を背景化するような傾向があることを指摘した [岡本2020]。つまり、両者の指摘からは、宗教が観光を忌避するというよりもむしろ、宗教の側が観光と積極的に関わり、その文脈を利用することで、多くの人々を聖地へ呼び込む、戦略的な様子を見出すことができるのである。

以上のように、仏教寺院と観光との関わりにおいては、制度宗教が「聖」であるという自己規定による、聖俗二項対立論が前提とされている一方で、現実としてはむしろ参拝客の誘致を目指して観光化を促進したり、観光客のニーズに合わせて信仰を背景化するような、寺院・宗教者側からの観光への接近という動向を見出すこともできる。つまり、現代において、制度宗教は「聖なる」側にとどまっているというよりはむしろ、これまでは「俗」と捉えられていたような観光現象にも自ら接近し、聖と俗のリミナルな領域を浮遊しているのではないかと考えられる。制度宗教と観光との関わりを捉えることは、制度宗教の境界や宗教領域を超えて非宗教的な領域へ流動、拡散すると指摘される [山中2016]、現代宗教の状況の一面を照射しうるのではないだろうか。

以上の研究動向を踏まえ、本稿では、「俗的な」観光と関わっていくなかで「聖なる」寺院がどのようにその境界を意識しながら自己の聖性を規定してきたのか、「俗なる」観光と「聖なる」寺院・信仰への意識、すなわち聖俗二分法的な価値表象における寺院側の自己規定を考察の対象とし、寺院内部における観光との関わり、姿勢の変遷に注目することで、現代の仏教寺院や、日本の宗教状況を捉える一助となることを目指す。

2. 対象地の概要と分析対象

本稿では、制度宗教内部の動向、特に寺院や宗教者の発言や意識が垣間見える資料として、寺院発行の機関誌や、新聞記事などの文字資料を分析対象とし、長らく観光化に関わってきた寺院として、江戸期には庚申信仰の聖地として、戦後には映画『男はつらいよ』のロケ地

として、全国から多くの参詣客を受け入れてきた寺院である、柴又帝釈天（経栄山題経寺、東京都葛飾区）を事例に取り扱う。

(1) 対象地の概要

筆者はこれまで、当該地における観光との関わりの歴史を、3つのイメージの転換期で捉えてきた。すなわち、1：庚申信仰の聖地としての柴又帝釈天、2：映画『男はつらいよ』のロケ地としての柴又帝釈天、3：柴又の「下町イメージ」のランドマークとしての柴又帝釈天、である。以下ではそのイメージに沿って、当該地の歴史を概観したい。

1：庚申信仰の聖地としての柴又帝釈天

柴又帝釈天の通称で知られる日蓮宗経栄山題経寺は、1629（寛永6）年創立、禅那院日忠上人開山、二世題経院日栄上人を開基とするが、その呼称は題経寺の寺宝である、帝釈天王の彫られた板本尊に由来している。1779（安永8）年の春、第九世の亨貞院日敬によって、長らく所在不明であった板本尊が本堂の改築の折に梁上より発見される。この板本尊出現の日が暦上の庚申の日にあたったことから、江戸で流行していた庚申信仰と柴又帝釈天が結びつき、多くの人々が遠路はるばる訪れる、巡礼の地となる。六十日に一度めぐってくる庚申の日には、板本尊が開帳され、当日催される縁日と相まって大変賑わいを見せたといひ、その賑わいは河竹黙阿弥の世話狂言、十方庵敬順の『遊歴雑記』などからうかがい知ることができる²。

2：映画『男はつらいよ』のロケ地としての柴又帝釈天

江戸期より庚申信仰の聖地として続いてきた柴又帝釈天は、1969（昭和44）年より制作・公開された松竹映画『男はつらいよ』シリーズのヒットを機に、“寅さんで有名な”場所として世間に認知されるようになり、映画で描かれた古き良き時代の情緒や人情を求めて、多くの観光客が訪れるようになる。この頃から、庚申の日のみならず土日にも参詣客でにぎわうようになり、それにともなって柴又地域全体で、『男はつらいよ』のロケ地であることを喚起する取り組みがなされていく。京成金町線柴又駅前の主人公「フーテンの寅」・その妹「見送るさくら」の銅像や、柴又帝釈天の裏手に建つ「葛飾柴又寅さん記念館」などは、現在でもロケ地めぐりの名所となっている。

3：柴又の「下町イメージ」のランドマークとしての柴又帝釈天

“寅さんで有名な”場所であった柴又であるが、1995（平成7）年の映画シリーズの終了とともに「映画を知らない世代に柴又をどのようにアピールするか」といった、これからの柴又のイメージについての模索が、参道商店街や行政を中心としてなされるようになる。ここでは、映画で描かれた「下町」イメージを守るべく、街並み保全の取り組みや、「重要文化的景観」へ向けての試みが行われていき、柴又帝釈天もその下町性を喚起する核として位置づけられていく³。

(2) 分析対象

以上で概観した変化を、柴又帝釈天と観光との関わりの転換期と捉えると、本稿で主眼とする制度宗教内部における「俗」（観光）との関わりが特に顕著になるのは、映画『男はつらいよ』による観光客を受け入れるようになってからであるといえる。そこで本稿では、映画放映以前より現在に至るまで柴又帝釈天が発行している機関誌『柴又』（写真1参照）を



写真1 『柴又』
創刊号表紙

もとに、(1) 映画シリーズ放映以前、(2) 映画シリーズ放映中、(3) 映画シリーズ終了後、の3期に分けて、寺院内部において観光との関わりがいかにか捉えられ、また寺院の自意識にどのような変化をもたらしたのかを分析していく。分析対象は主に『柴又』の創刊1号(1961(昭和36)年)～198号(2017(平成29)年)であるが、適宜『読売新聞』などの一般紙も補足資料として取り扱う。

3. 『柴又』から見る寺院の観光への発言・意識

本節では、『柴又』1号～198号における、誌面構成と寺院住職・関係者の発言に注目しながら、寺院内部において観光との関わりや姿勢がいかにか模索されてきたのかを見ていく。

(1) 映画シリーズ放映以前(1961(昭和36)年～1964(昭和39)年、創刊号～19号)

1961(昭和36)年、寺院発行の機関誌『柴又』が創刊される。柴又帝釈天はこれまで発行してきた教誌『柴又教報』とは異なる雑誌として『柴又』を刊行しており、その意図を当時の住職である第17世望月日滋⁴は以下のように述べている。

「今迄の柴又教報はいわば題経寺中心の信徒版とも言うべきもので、題経寺がどのような宗教活動をしているかを檀信徒の皆様知って貰い其の協力を求めると同時に、又檀信徒の方々の動静をも出来るだけ伝えて、一つは檀信徒方と寺との親しい結びつきを造り、も一つは檀信徒相互の懇親を温め互に信行を深めて行く機会を与えていこうとするところにその重点があったのである。／然し時代の要請は、いつまでもこのような特定の檀信徒の教化懇親と言うような小さなワク内に止っている事を許されなくなった。／つまり今日では一般信徒は元より一般大衆へ向っても正しい宗教信仰の鼓吹を叫ばねばならない時代であり、同時に仏教の正しい理解を与える事が絶対必要な事になってきたからである。」(『柴又』1号、1961(昭和36)年、1頁)

(下線部ならびに改行記号(／)筆者加筆、以下同)

以上の発言からは、当時の住職が同時期の宗教状況を意識しながら、檀家信徒のみならず一般大衆へも教化の必要があることを自覚している様子がみとれる。

また、当時の記事内容に着目してみると、主に帝釈天や庚申信仰にまつわる記事、檀信徒が信仰体験について語る記事、法華経説話や日蓮宗の開祖日蓮の記した御遺文の話、柴又帝釈天の歳時記や行事報告、で構成されており⁵、江戸末期より続く庚申信仰の聖地として、帝釈天詣でが柴又帝釈天にとって主要なトピックであったことがわかる。

一般大衆への発信を目的に発行され、柴又帝釈天の庚申信仰や歳時記、信仰生活や仏教関連の話題など、参詣の歴史と仏教の信仰を伝える雑誌として続いた『柴又』であったが、1964(昭和39)年に19号で休刊し、以降復刊は映画『男はつらいよ』シリーズの放映が開始する1969(昭和44)年となる。

また、この頃の新聞記事においては初詣や節分における帝釈天の混雑が他の寺院と並んで度々報道されるものの⁶、住職や寺院関係者が一般紙面にて発言することはほとんどなかった。

(2) 映画シリーズ放映中 (1969 (昭和44) 年～1995 (平成7) 年、20号～114号)

『柴又』が復刊するのは1969 (昭和) 年2月の20号であり、同年8月に映画『男はつらいよ』1作目が公開、徐々に人気シリーズとなっていく。

休刊の経緯は定かではないものの、その復刊の経緯に関しては、住職の望月日滋が巻頭言「柴又」復刊の挨拶」で以下のように述べている。

「従来の「柴又」は、信徒と寺との間における信行を中心とした結びつきを計ったもので、信徒に「正しい信仰とは何か」を知ってもらい、又「宗教による家庭生活の浄化」を強調したものであったが、新しい「柴又」はもちろん従来の立場を堅持しつつも視野を広げて、此寺をとりまく所と人々に焦点を合わせ、実生活の場に溶けこんでいる信行の姿をとらえて見たいと思う。そしてなるべく自由な表現で、たとえ直接宗教に関心のない人にも、何等かの興味と示唆を与えられる親しみのあるものにしたいと思う。」(『柴又』20号、1969 (昭和44) 年、1頁)

上記の引用からは、今後の方針として、より実生活の信仰の場に根差したトピックを提供していくこと、直接宗教に関わる檀信徒以外の層に向けて、より一般大衆向けの雑誌となることを意識している様子がうかがえる。

ここで示す「自由な表現で」、「たとえ直接宗教に関心のない人にも、何等かの興味と示唆を与えられる」トピックが何を指しているのか、住職は具体的に言及はしていないものの、その目次から目指すべき方向性を推し量ることが可能であろう (表1 参照)。

これまでの雑誌の構成同様、帝釈天詣でを紹介する記事や、御遺文に関する記事が並ぶ中で、檀信徒の信仰体験を取り上げる記事は下げられ、新たに参道商店街の店や地元の人々を紹介する記事が追加されている。

また、注目すべきは、復刊記念である本号において、柴又帝釈天の信仰とは直接関係のな

表1 『柴又』20号目次

| 『柴又』20号目次 | |
|-------------------------------|------------|
| ★口絵★彫刻の寺 (木彫り職人の気質を伝える数かずの彫刻) | …2 |
| この人・この店 いらっしやいませ! 「五右エ門」 | …4 |
| 初春の葛飾 | …6 |
| 葛飾ッ娘 | …8 |
| ≪特集≫座談会 彫刻の寺を語る (木彫り職人の世界) | …12 |
| <新春対談> 葛飾今・昔 (小川葛飾区長と語る) | …28 |
| 帝釈天由来 帝釈天と庚申詣り | 経栄山 日滋 …10 |
| 御遺文講義 春を迎える心 | 渡辺宝陽 …38 |
| 柴又文学散歩「大番」 | …36 |
| 男はつらいよ (スタジオの中の柴又を訪問) | …42 |
| 柴又時報 | …46 |
| 趣味のスポーツ クロスボー | …32 |
| 帝釈天なんでも相談 | …41 |
| 柴又の日日 | …48 |
| 帝釈天参拝交通図 | …34 |



写真2 『柴又』20号、42-43頁

い『男はつらいよ』に関するトピック（「男はつらいよ（スタジオの中の柴又を訪問）」、写真2参照）が含まれていることにある。

松竹映画『男はつらいよ』シリーズは、1作目公開以前の1968（昭和43）年10月から1969（昭和44）年3月まで、フジテレビにて連続ドラマとして全26話が放映されたが、そこで柴又が本作の主人公の故郷として設定されたことで、柴又帝釈天とのつながりができたという。その経緯は、『柴又』の特集記事内で以下のように語られている。この当時の雑誌の編集人⁷は、次期住職である望月良晃であった。

「毎週木曜日、夜の十時から四十五分間、フジテレビから放送されているテレビドラマ“男はつらいよ”の冒頭には、いつも決まって渥美清の名セリフが流れる。この好評のドラマは昨年の十月八日に始まり、今年の三月まで放映される予定で目下人気を集めているが、このセリフ⁸が毎回くり返されるので「柴又」に関係のある人々の注意を引かずにはいない。／信徒の間でもしばしば、話題にのぼりかくして柴又を舞台に展開される“男はつらいよ”に俄然、話題が沸騰するところとなった。丁度「柴又」の復刊に因み、それではいっそフジテレビを訪問し、スタジオの中の柴又是帝釈天の参道近くの「人々」に会ってみようと話が決まった。…（中略）…「柴又」PRに一役買った楽しい時間だった。」（『柴又』20号、1969（昭和44）年、42-43頁）

（中略記号（……）筆者加筆、以下同）

以降、『柴又』では松竹映画『男はつらいよ』ロケ余話、「映画紹介『男はつらいよ』」といった記事、ロケ風景の写真などが掲載されるようになり、これまでの柴又帝釈天の信仰や歴史、御遺文や仏教説話などの教化色の強い記事に加え、柴又に関する記事や、『男はつらいよ』の記事が多く取り上げられるようになり、復刊時の意図に即した一般大衆向けの特色ある記事が増えていく。

『男はつらいよ』シリーズはその後約30年弱続くヒット作となっていくが、柴又帝釈天では、

1974（昭和49）年に第17世の望月日滋が総本山身延山久遠寺の法主となったことを受けて、住職が第18世の望月日翔（望月良晃）へ継承される。この時期以降、『柴又』発刊当時に掲載されていた檀信徒による信仰体験の企画が再始動するなど、記事内容にも変化が起こる。『男はつらいよ』関連の情報は「柴又時報」のなかで行事の一環として言及される程度の紙幅となるが、その一方で柴又のロケ地としての人気は続いており、その盛り上がりに関して住職は以下のように発言している。

「最近では御存知のように「男はつらいよ」の寅さんの故郷として、柴又は人々に愛されている。柴又は、時代によって変化してきた。しかし一貫して庶民の感覚を保ちつづけた。日曜祭日ともなると、若い人達が、どこからともなく集ってくる。私共は、こうした一見、縁のない人達をも何か仏縁に結ばなくてはならない。ヤングの心を把える新しい庶民信仰のあり方を探索していくことが、今年の私の課題である。」（31号、1975（昭和50）年、7頁）

「最近、私は、若い女の子に、「お寺って何で在るの？」と質問されて驚いたが、正直に言って若者の、寺に対する認識はそんなものである。広い寺域の中におさまっている寺の存在が、彼等には不思議に思えるのだ。／その意味で、すべての寺が門戸を開いているとは考えられない。つまり、何らかの方法で、社会の需要（ニーズ）に応える必要がありはしないか。／新しい時代に向けての演出方法を工夫して門戸解放をしなければならぬ時代が来ている、と痛感した次第である。／幸い、当山は、庶民の寺として親しまれ、最近では、寅さんブーム、演歌「矢切の渡し」などで喧伝せられ、全世代の人々が、見物を兼ねて来詣されている。」（73号、1985（昭和60）年、5頁）

上記の『柴又』における発言からは、「仏縁」や「新しい時代に向けての演出方法」といった表現で、『男はつらいよ』をきっかけに柴又帝釈天を訪れる人々を、布教教化や、寺院のあり方を提示していく対象として見ていることがわかる。この、観光目的の人々を寺院の役割であるところの教化・布教の文脈で捉える住職の姿勢は、1970年初頭、住職の望月良晃が総務の位に就いていた頃から既に示されている。以下は一般紙における発言である。

「「宣伝する。人が集まる。これは布教に通じる。」…（中略）…「お寺は信者だけの“道場”ではない。仏法を広めるための“法城”でなければならない。」（「“寺の商法”とんでもない これ仏法の布教なり」『読売新聞』1971年12月27日朝刊）

「題経寺では十二年前から、一般大衆に仏教の正しい理解を与えようと「柴又」という小冊子を発行している。…（中略）…「この寺に来る人に、フィーリング的なものを通じてでも、仏教になじませ、なんらかの仏法との縁をつけさせてあげたい。」（良晃氏）…（中略）…境内には、きょうも、年配の信者にまじって、信仰とは縁遠そうな“寅さん族”の姿が目立つ。」（「通じるか、“フィーリング説法”」『読売新聞』1973年02月04日朝刊）

1970年代は国内観光が飛躍的に成長した時代でもあり〔手島2008〕、柴又帝釈天は既に1962（昭和37）年より運行されていたはとバスの人出とともに、映画『男はつらいよ』シリーズのヒットで多くの観光客を受け入れるようになっていた。その機会を住職は「仏縁」や「仏法との縁」といった語で布教と結びつけ、観光行動を信仰へのきっかけという聖なる文脈に置き換えているのである。

（3）映画シリーズ終了後

映画放映中はロケ地を目的に寺院を訪れる人々を布教の対象としてポジティブに捉える姿勢を見せた柴又帝釈天であるが、映画『男はつらいよ』シリーズが主演の渥美清の逝去をきっかけに1995（平成7）年12月の48作目で終了すると、一転して観光と信仰の境界を意識的に区切るようになっていく。

「編集子は以前より「寅さんは永遠」ではないと、そして寅さんに頼っての町の繁栄では先がない、と主張していました。…（中略）…確かに、繁栄を求めるためには、「人」が重要です、しかし経済を優先させるため、我々は、心、信仰心を忘れてしまっていたのではないのでしょうか。／「寅さん」も柴又の町のために非常に重要な要素だったと思います。しかし三百年もの長い間、人々から信仰され、お護りされてきた「帝釈さま」のお陰だ、ということをお忘れてはならないようです。」（118号（「寅さん追悼号」）、1996（平成8）年、64頁、編集人大神達夫）

上記の『柴又』編集人の発言からは、本号が「寅さん追悼号」であるにもかかわらず、『男はつらいよ』ブームにあやかる町の盛り上がりに対して警鐘を鳴らし、信仰心の低下を嘆く様子が見えがえる。このような一転した信仰の再強調は、誌面の構成にも表れており、追悼号を除いて、『男はつらいよ』シリーズに関わる記事は少なくなる。その一方で、柴又地域では引き続き1997年（平成7）年に「葛飾柴又寅さん記念館」が開館し、1999（平成11）年には柴又駅前広場に「フーテンの寅」像が建立されるなど、映画のロケ地にちなんだ観光名所の開発が進んでいく。

2000年代に入ると、引き続きロケ地ブームの中で信仰の低下を嘆きつつも、映画で描かれた「下町性」という表現の中で柴又帝釈天の信仰を結びつける発言が見られるようになっていく。この時期は、参道商店街や行政が、柴又のイメージ戦略として、映画のイメージから、映画で描かれた「下町」イメージへの転換を図り、街並み保全の取り組みや、「重要文化的景観」へ向けての試みを進めていく時期とも重なっている。

「いつの時代でも下町の文化を反映して「柴又帝釈天」は忘れ去られることなく、東京下町の人々の心の支えとなって、今日に至っております。特に私がこの寺をお預かりして、山主を勤めさせていただいた時期は。映画の「男はつらいよ」の寅さんブームとなり、お陰さまで、日本全国、いや、世界にまで広く、柴又帝釈天の名が知れ渡りました。おかげで遠くからの参詣者の訪れが絶えません。／このため、「寅さん会館」などが造られ、浅草寺やディズニーランドと並んで東京観光のコースになっております。／このため、「柴又帝釈天」は寅さんのお寺として人々に知れ渡り、本来の「帝釈天信仰」、「庚

申詣で」の信仰の寺としての帝釈さまの影が薄くなってしまっているようです。／私も帝釈天をお預かりしている者にとっては、広く人口に膾炙することは、これも帝釈天のご威光とは思ひ感謝いたしておりますが、観光バスやガイドさんが境内で観光客に案内している際、「おサル寺」とか「寅さんの…」という説明で、本来の当山の由来とか信仰のことは余り説明されていないようです。」(148号、2004(平成16)年、4頁、望月日翔)

ここにおいて住職は『男はつらいよ』が喚起する柴又の下町文化の中に柴又帝釈天の庚申信仰や帝釈天への参詣を位置づけ、映画のブームによって信仰に注目が向けられていないことに危機感を抱いている。この様子を映画放映中との対比で捉えると、映画を動機とする訪問に信仰のきっかけ(仏縁)を見出す放映中の姿勢に対して、シリーズ終了後の柴又帝釈天では、『男はつらいよ』を柴又帝釈天の信仰と対立するものとして意識し、俗的な観光によって信仰という聖が背景化することを嘆いているのであるといえる。

この認識は当時の『柴又』の誌面構成にも影響を与えているといえ、記事内容は『男はつらいよ』よりもむしろ、建造物や彫刻、郷土史に関するトピックが増え、柴又帝釈天の信仰にまつわる文化を取り上げる姿勢が強くなっていく。柴又帝釈天の信仰を「下町文化」と称し、2004(平成16)年の148号からは「山主法話 帝釈天と下町信仰」と題した対談記事を複数回に渡り掲載している。彫刻に関しては、2005(平成17年)発行の153号より「帝釈天と法華経彫刻」の連載が始まり、郷土史関連の話題としては、2006(平成18)年の154号から「かつしか歴史探訪方」の連載が始まっている。

また、境内の大客殿のライトアップなど、歴史的建造物を活用するイベントも行われるようになっていき、行政や商店街の思惑と合致する形で、町並みや景観を意識した試みを行っていることがわかる。

「景観照明は今では欠かすことの出来ない観光資源となっています。…(中略)…「わが町にはこんな立派な文化財がある。」と再認識して頂けたのではないのでしょうか。／歴史的に価値のある建物ライトアップは大変効果的です。幻想的な光と影が描き出す歴史の重厚さは日中の陽の中では感じる事ができないものです。」(152号、2005(平成17)年、62-63頁、広報・『柴又』編集人須山保)

2010年代以降においても同様に、柴又帝釈天が映画『男はつらいよ』のイメージではなく、歴史的な建造物や彫刻を有した寺院であるという面から見られるよう、模索している様子を、一般紙の発言からもうかがうことができる。

「(柴又帝釈天が本堂等に施された木彫りの彫刻にちなみ「彫刻の寺」とも呼ばれているという記事の中で)寅さんとはまた違う寺の一面も見て欲しい」(「らんどまあく@東京帝釈天参道「変えない開発」に手応え」『朝日新聞』2011年1月6日朝刊、須山保)

(引用部括弧内筆者加筆)

以上で見てきたように、柴又帝釈天においては特に映画『男はつらいよ』シリーズによる

ロケ地探訪の観光客を受け入れるなかで、それを布教の文脈で理解したり、時には信仰を背景化させるものとして意識的に言及し、それ以外の魅力を発信する姿勢を見せるなど、当時の社会状況や信仰状況の変化とともに様々な対応、意識の変化を見せてきたことが明らかとなった。次節では、本節の分析を改めて概観した上で、制度宗教内部における聖俗の価値表象、それにともなう自己規定の変遷についてまとめていきたい。

4. 観光化にともなう寺院の自己規定の変遷

ここでは前節で資料からうかがえた、柴又帝釈天と観光との関わり、またそれにともなう寺院の意識の変化をあらためてまとめたい。その変遷は、寺院が自らの持つイメージや、役割としての仏教の布教を、観光との関わりをなかでどのように位置づけるのか、つまり「聖なる」側に位置づけられていた寺院が、観光という「俗的な」現象を経験していくなかで、観光をどのように包摂、あるいは距離をとりつつ自らの聖性を価値づけ表象し、自己規定するのか」という点から見た際、三つの段階で捉えられるだろう。すなわち、(1) 映画放映以前の「信仰鼓吹」期、(2) 映画シリーズ放映中「観光の信仰化」期、(3) 映画シリーズ終了後の「信仰と観光の再文脈化」期、である。

(1) 映画放映以前の「信仰鼓吹」期：

まず、映画放映以前においては、当時の宗教状況に即して、「一般大衆へ向けた正しい宗教信仰の鼓吹」を目指す寺院自らの意識が雑誌において示されていた。その背景には、1960年代当時、各仏教宗派や教団を含む仏教界において、近代的な価値観や科学の発展にともなない宗教の重要性が低下するのではないかという危機感や、新宗教の台頭などの外在的要因と、教団内部における体制革新の必要性といった内在的要因とが混ざり合い、制度宗教として保持していた基盤に変化が起ころうとした時期であったという事情も関わっているだろう。特に日蓮宗では、都市化や核家族化といった社会構造の変化を見据え、宗門組織の再編、現代社会に適應した布教伝道を目指し信仰を鼓舞する護法運動が展開した⁹。そのような背景のなかで、柴又帝釈天もより広い人びとへの布教を目指し、「正しい信仰」を発信していった。その際の、柴又帝釈天にとっての「正しい宗教信仰」、自己の聖性はすなわち帝釈天への信仰であり、それはそのまま帝釈天詣での文化であったことが掲載記事のトピック内容から推し量れるだろう。庚申の様子や帝釈天詣での記事が定期的に挟まれることから、庚申が当時の柴又帝釈天の重要なファクターと認識されていた様子をうかがうことができる。このように、「信仰鼓吹」期においては、当時の宗教状況を敏感に感じ取り、メディアという媒体を巧みに活用しながら、檀家信徒のみならず、一般大衆への教化を意識していたことが『柴又』創刊の経緯から明らかになった。

(2) 映画放映中の「観光の信仰化」期：

その後、映画『男はつらいよ』シリーズの開始とともに『柴又』は復刊し、誌面をリニューアルする。より一般大衆向けの雑誌となることを意識しながら、「松竹映画『男はつらいよ』ロケ余話」、「映画紹介『男はつらいよ』」といった記事、ロケ風景の写真がトピックとして掲載されるようになる。当時の住職の発言からは、『男はつらいよ』による参詣をポジティブにとらえ、柴又の魅力としてアピールする様子が見え、ロケ地巡りを目的とする観光

客に対して、広く門戸を開放し、仏教を布教・教化する対象と見なし、観光目的で訪れる行為を仏教に関わるきっかけ、「仏縁」ととらえている。つまり、ここにおいて観光は、寺院にとって信仰と結びつくものとして聖の領域で置き換えられているのである。この意識は、構造的にはむしろ聖を担う寺院側が俗なる観光に接近していく方向性として見ることも可能であるが、あくまで寺院内部における自己規定としては、観光を布教という聖なる文脈に位置づけなおしているのだと捉えられる。

(3) 映画シリーズ終了後の「信仰と観光の再文脈化」期：

映画シリーズ放映中は布教という文脈を通して、観光客に積極的に歩み寄る姿勢を見せた一方で、シリーズ終了後は一転して「信仰」を再強調していく。そこでは薄くなった信仰を嘆き、『男はつらいよ』だけではない、歴史ある街並み・景観といった柴又本来の良さ、その一要素である彫刻や文化財といった柴又帝釈天古来の良さをあらためて強調する動きが見られるようになる。映画放映中とは異なり、『男はつらいよ』に困っている面もあると主張し、信仰が背景化していることに言及しながら、『男はつらいよ』による観光と、柴又帝釈天が持つ歴史や文化という信仰を区別していく。『柴又』の誌面も柴又の持つ伝統的な建造物や彫刻などの信仰によって支えられてきた文化資源に関する特集が組まれるようになり、映画による観光だけでなく、柴又・柴又帝釈天本来の良さを生かした街並みや景観を活用し、柴又地域の振興を進めていく動きを見せていく。

ここにおいて特筆すべきは、一見信仰と観光とを区切り、『男はつらいよ』による観光が信仰を背景化してしまうという形で観光と信仰を対比させながらも、「下町らしい景観」を喚起する試みのなかで、それらが一体となっていることにある。換言すれば、観光と信仰を区別するような発言が見られながらも、実際は「下町らしさを保存する観光政策」と「下町らしい町並みや建造物を形作ってきた信仰の歴史や文化」が、ともに結びつく形で、観光と信仰が同一線上に乗るような文脈を形づくり、信仰と観光が「下町文化」のイメージのもとに共存する言説が作り出されているのである。

実際にこの時期の『柴又』の記事内容を見ると、映画放映以前の「信仰鼓吹」期とは異なり、檀家・信徒の信仰体験や参詣の歴史を直接魅力として表現しているのではなく、そのような信仰生活そのものよりもむしろ、その歴史や文化が形作ってきた建造物や彫刻、町並みに関する記事が組まれるようになっている。また、この建造物や彫刻への重視が、ライトアップイベントなどの形で、行政や商店街の目指す「下町」としての柴又の魅力を喚起する試みと結びつき、併行して行われている。それらによって、柴又帝釈天は従来の『男はつらいよ』による観光色や商売っ気の強い俗的なイメージから脱却しながらも、「下町らしい景観を形作った信仰の歴史や文化」というイメージでもって、観光の文脈と信仰とを結びつけ、聖なる空間としての自己規定を保持することができているのである。

おわりに

現代において、仏教寺院はその存続が危ぶまれている一方で、むしろ寺院を観光や多様な動機で訪れる人も目立つようになっている。本稿ではそのような宗教と観光、聖と俗の接近という事態に着目し、なかでも制度宗教内部における観光との関わりを取り上げる視点が少ないという点から、柴又帝釈天発行の機関誌『柴又』を事例に、観光に対する寺院側の意識

や動向の変遷を分析した。

その結果明らかになったことを先行研究との関わりで捉えなおしたい。従来の研究では宗教の側が観光と積極的に関わり、その文脈を利用することで、多くの人々を聖地へ呼び込む、戦略的な様子や [卯田2020]、あえて信仰を背景化するような語りを見せる様子 [岡本2020] などが指摘されてきた。一方で本研究の事例からは、むしろ観光と関わるなかで、観光をポジティブに捉えたり、俗的なものとして聖なる信仰と区切ったり、その区分を乗り越える形で文脈転換を図り、信仰と観光が両立する言説を形作る様子など、その都度、社会状況や地域社会の状況に即してさまざまに「聖なる」寺院と「俗なる」観光という二分的な聖俗表象を再文脈化し、自己規定を価値づけながら対応してきた寺院の様子が明らかになった。

江戸期には流行寺として関東近郊有数の参詣地となり、昭和期からは映画のロケ地としても知名度を高めた柴又帝釈天は、他の寺院にない特殊な歴史を辿った事例として位置づけられ、そこで見られた事象は普遍的なものではないと思われるかもしれない。しかし、現代では地方の檀家寺院でありながら、突発的にアニメの聖地として多くの観光客を受け入れるようになる寺院も少なくない。また、コロナ禍にはアマビエを利用した御朱印や御首題を始める寺院もみられ、観光と信仰との境がますます曖昧になっていくなかで、観光との関わりは、京都や大都市の有名観光寺院だけの問題ではなくなっているともいえよう。そのため、寺院の現在や未来の展望を見据える上でも、聖俗がリミナルに接続する現代の信仰意識や宗教状況を考察する上でも、観光と宗教との関わりに着目することには価値があるといえる。今後はその他の宗教的聖地や寺院の事例と比較検討することで、より立体的な考察を試み、新たな課題や展望の発見につなげたい。

参考文献

- 相澤秀生・川又俊則編2019『岐路に立つ仏教寺院—曹洞宗宗勢総合調査2015年を中心に—』法蔵館。
- 鶴岡秀徳2015『寺院消滅』日経BP社。
- 卯田卓矢2020「ツーリズムによる聖地運営システムの構築—比叡山延暦寺を事例として—」山中弘編『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂、149-168頁。
- 近江幸正1986「宗徒総決起大会から護法運動へ」『現代宗教研究』第20号、現代宗教研究所。
- 岡本亮輔2020「信仰なき聖地巡礼」『宗教研究』第398号、57-80頁。
- 小高絢子（絢華）2021「行政における仏教の文化資源化—柴又帝釈天の庚申信仰を事例として—」『現代宗教研究』第55号、147-173頁。
- 櫻井義秀・川又俊則編2016『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から—』法蔵館。
- 佐藤久光2004『遍路と巡礼の社会学』人文書院。
- 手島康幸2008「マストツーリズムの歴史の変遷と今後の行方」『日本国際観光学会論文集』第15号、11-17頁。
- 藤村健一2016「京都の拝観寺院の性格をめぐる諸問題とその歴史的経緯—とりわけ古都税紛争に着目して—」『立命館文學』第645号、64-79頁。
- 仏教タイムス社編集部2020『近現代日本仏教の歩み—明治から平成まで150年を追跡—』仏教タイムス社。
- 松井圭介2008「巡礼と観光—中世から続くサンティアゴの道」菊地俊夫編『観光を学ぶ—楽しむことからはじまる観光学』二宮書店。
- 山中弘編2012『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』世界思想社。
- 2016「宗教ツーリズムと現代宗教」『観光学評論』第42号、149-159頁。

註

- 1 (株) プラネット2018「お寺・神社に関する意識調査」『Fromプラネット』Vol.90 (https://www.planet-van.co.jp/pdf/fromplanet/fromplanet_90.pdf)。
- 2 河竹黙阿弥が1877年に記した世話狂言『富士額男女繁山』では、帝釈天を目指す法華信徒の参詣の様子が下記のように表現されている。

今日は庚申で、竹筒ッぼうや徳利を、ぶら〜提げた法華宗が、帝釋様へ出掛けたから、向島は賑やかだ…(中略)…祖師のえ、祖師の真筆帝釋天王、利益はあふる、井筒の清水、庚の申ばで七杯呑んだら、腹がだぶ〜だぶだぶ〜、野掛半分女中の一団、きやつきやと騒げや、お猿の縁日、賑はしいではないかいな。

(河竹繁俊(1925)『黙阿彌全集第十二巻』春陽堂、577-578頁。)

また、十方庵敬順は『遊歴雑記』において、柴又帝釈天を「芝股の帝釋といふは是也。…(中略)…日蓮の像をすえたり近頃の流行寺とす。」と紹介している(釈敬順(1916)『遊歴雑記2編上』江戸叢書刊行会、249-250頁)。
- 3 映画終了後の地元商店街や行政による下町性を喚起する試みや、重要文化的景観選定への取り組みに関しては、小高2021に詳しい。
- 4 望月日滋：帝釈天第17世。日蓮宗の宗務総長を務め、昭和36年(1961)7月1日に宗務総長を辞任。さらに昭和49年(1974)には身延山第八十八世の法灯を継承し、法主に就任。同年6月17日身延山御入山。昭和57年(1982)2月1日遷化。
- 5 帝釈天詣でや庚申信仰に関しては、参道商店街形成の話(1号、1961(昭和36)年)や、参詣客を運んだ帝釈人車鉄道の歴史(2号、1961(昭和36)年)、庚申信仰の猿にまつわる郷土玩具ハジキザルの紹介(8号、1962(昭和37)年)、帝釈天詣での様子を語る座談会(18号、1964(昭和39)年)など、聖地形成の歴史や当時の参詣の様子を取り上げる記事が見られる。

檀信徒の信仰体験に関しては、「私の信仰体験」(2号、1961(昭和36)年)、「帝釈様のご加護に生きる」(3号、1961(昭和36)年)など、実体験に根差した個人の信仰が紹介されている。
- 6 「行楽案内 初もうで 鶴岡八幡宮▽鎌倉宮▽岡村天満宮▽柴又帝釈天」(『読売新聞』1962年12月28日夕刊)など。
- 7 雑誌『柴又』の編集人は望月良晃氏(第18世住職)、大神達夫氏、須山保氏と引き継がれている。現在の編集人の須山氏は、雑誌の編集人兼、寺院の広報を担っている。観光という現象に対して最前面で関わる寺院関係者であるといえ、雑誌における編集人の発言は即ち寺院における観光への姿勢、意識の表層と考えることができるだろう。
- 8 ここでセリフとして言及されているのは、主人公の口上「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い姓は車、名は寅次郎。人よんでフーテンの寅と発します」である。
- 9 近江幸正1986「宗徒総決起大会から護法運動へ」『現代宗教研究』第20号、現代宗教研究所、ほか参照。